

令和7年度第1回富津市総合教育会議資料

- ・ねらい：富津市の学校教育の充実を図るため
- ・内 容：富津市の学校教育の現状と課題について理解し、今後の方向性を検討する。
- ・報告1 富津市学校教育の現状と課題
 - 2 令和7年度学校教育に関する重点施策
- ・協議事項 今後の学校教育に関する重点施策

1. 報告

(1) 富津市学校教育の現状と課題

ア. 富津市全体（学校生活全般、学力、体力、不登校）

「学校は落ち着いている。子どもは素直、保護者・地域もおおむね協力的、職員集団はまとまっている。」というのがほとんどの学校管理職の見解である。確かに学校訪問をすると子ども同士、子どもと教職員の良好な関係を目にすることが多い。また、深刻な暴力事件やいじめ重大事態の件数はゼロとなっており、生徒指導的にも比較的に安定している状態が続いている。また、体力についてはスポーツテストのデータから判断するとほぼ県平均並みと言える。

ただ、全国学力学習状況調査や県標準学力テストの結果を見ると、市全体としては県平均を下回っている。また、不登校率は市全体で4.98%（R6 県3.34%）となっており、県平均を上回っている。「富津を愛し、富津の未来を託せる児童生徒の育成」のためにはこれらの課題解決に向けた取り組みが急務である。

素直な子どもたちだからこそ、一人ひとりの力を伸ばし、やれる・できるという自信を持たせ、未来を自分の力で切り開いていけるような素地をつくってあげたい。さらに、「学級が楽しい、学校が楽しい」ということが、郷土愛を育み、富津を愛する子どもたちの育成とつながる。

*全国学力学習状況調査：年1回、4月実施。全国の小6、中3が対象

*県標準学力テスト：年1回、2月ごろ実施。県内の多くの学校で全学年対象

*不登校：30日以上欠席（長欠）のうち、病気や経済的理由でない状態

イ. 学校ごとのデータ

学級数（特別支援学級数で内書き）、児童生徒数（学級数と同様）、県費負担教職員数

○青堀小：25（6）学級、578（42）人、37人、プラスルーム、日本語教室

○富津小：8（2）学級、105（6）人、13人

○飯野小：9（3）学級、157（9）人、14人

○大貫小：8（2）学級、163（13）人、16人

○吉野小：8（2）学級、107（6）人、13人

- 佐貫小：5（2）学級、30（4）人、11人
- 天羽小：10（4）学級、164（18）人、19人
- 環小：6（2）学級、41（6）人、12人

- 富津中：16（4）学級、473（24）人、31人、校内教育支援センター
- 大佐和：8（2）学級、180（3）人、18人
- 天羽中：7（2）学級、124（13）人、17人、校内教育支援センター

ウ．教職員人事

充実した学校経営を行うにあたり、教職員の指導力は大変重要な要素である。指導力のある教職員には市内の学校で十分に活躍してもらいたい。しかしながら、教職員の人事はさまざまな異動のためのきまりがあるので構想通りにはいかない。

主な人事上の課題は以下の3点

- ① 中学校が3校しかないことでこの枠内で異動させるのは難しい。
- ② 4市教職員のうち富津市在住の教職員は少ない。112名、7.2%
- ③ 富津市で新規採用された教職員は、一度市外へ出ると戻ってこない傾向にある。

（2）令和7年度学校教育に関する重点施策

富津市学校教育の指針

「富津市の未来を託せる児童・生徒の育成」

心豊かでたくましい児童・生徒の育成

確かな学力を身につけた児童・生徒の育成

児童・生徒の成長を支える教育力の高い学校づくり

ア．読書活動の推進

学力向上のカギは読解力の向上にある。そこで、読書に親しみ、読書を好きな子どもを育てていくことで最終的には学力向上につながっていくと考え、読書の日の設定、読書支援員の配置等により、ここ数年読書活動の充実を図ってきた。

子どもたちが学校で本に親しむ姿は多く見られるようになったが、家庭での読書習慣が定着している子どもの数は決して多くない。また、全国学力学習状況調査や県標準学力テストの結果から見ると学力向上につながっているとは言い難い。

イ．授業でカエル

ここ数年、学校行事や部活動にかかる時間削減が進む中、授業の充実が今まで以上に求められている。学力向上、不登校解消、体力向上、社会性の育成、これらすべての

課題に対し、授業を通して解決していく。いわゆる授業改善が大切となってくる。一人ひとりの教職員が、自らの授業を見直し、これを変えていく覚悟がないとなかなか授業は変わらない。さらに、授業がよくなったのか、改善点はどこなのかといった日常的な管理職からの指導が最も必要となる。他にも教育事務所指導主事を活用して授業や学級経営の指導を受けること、小小（小学校と小学校）連携、中中連携、小中連携を図り、互いに授業を見合うこと、自らの課題に合った夏季研修講座を受講すること、こういったことを通して授業改善を図る。

令和7年度からスタートした施策であり、教職員の意識は変化したと思われる。実際の授業改善はまだ道半ばである。

ウ. 富津市の環境や風土を生かした学習の推進

郷土の歴史や文化・産業の理解を深め、富津市に誇りと愛着を持てるよう、見学・体験的学習の充実に努めている。学校の教育課程に基づき、ふつつ検定や東京湾フェリー特別クルーズ、古墳めぐり、市内校外学習、職場体験学習などを実施している。各学校で自校の課題にあった学習を推進している。

エ. 課題に対応した市雇用職員の活用

様々な課題を抱える学校に対して、市雇用の職員を配置して学校の教育力を補充している。自立支援指導員、学力向上指導補助教員、特別支援教育指導員、読書支援員、英語指導員、用務員、部活動指導員。委託としてALT及びICT指導員。これらの職員が配置されているから、落ち着いた学校経営が維持できている。

2. 協議事項 今後の学校教育に関する重点施策について

(1) 「社会性の育成のためにあいさつ運動の一斉展開」

あいさつはコミュニケーションの第一歩。社会性の育成にあいさつは欠かすことができない要素である。また、あいさつができる・できないというのは市民にとってもわかりやすいため、子どもたちの変容を感じてもらいやすい。そして、ほめられれば子どもたちも成就感を味わえる。また、あいさつを通して学級、学校の雰囲気良くなる。それが地域に広がれば、富津市全体の活性化につながることは間違いない。「あったかふつつ」のためにもあいさつを広げていきたい。

あいさつを広げる手立てをさまざまな立場から探していきたい。

(2) 「富津市の環境や風土を生かした学習の推進」

郷土の歴史や文化・産業の理解を深め、富津市に誇りと愛着を持つ子どもを育てる

ために体験的学習や見学の充実に努める。そのために教職員も地域を知ることが大切。特に今、内裏塚古墳群と鋸山という注目されている史跡・自然があるのでこれにかかわる学習を積極的に展開していきたい。

富津市の環境や風土を生かした学習を推進する上で新たな素材はないだろうか。また、鋸山と内裏塚古墳群という旬の素材をいかした今までにない体験的学習を考えていきたい。

(3)「授業でカエル」の一層の推進

今年度スタートした「授業でカエル」については教職員の意識向上を図ることはできた。引き続き取り組むことで、授業改善を図っていく。授業によって「できた」「わかった」と感じられることが学力向上の最大の要因となる。また、落ち着いた授業が展開されるにはそのための安定した学級経営や生徒指導が前提となる。落ち着いた学級で、わかる授業が展開されることで学力向上、不登校の解消、社会性の育成等すべての課題解消が図られる。

授業でカエル（授業改善）の一層の推進のためにさらに、どのようなことに取り組めばよいだろうか。

(4)「人材育成の必要」

人事の現状から、市外から力のある教職員を引き込むとともに、市内にいる人材を育てることが必要。特に、若手を育て即戦力とすることが学校経営上急務である。例えば、教職員の指導力が不足しているために学級が荒れて一人では指導が成立しなくなると、他の教職員が支援に回るような状況が生まれ、学校経営上大きな課題となる。教職員の指導力向上は喫緊の課題である。あわせて、中堅職員を育て、管理職候補へと育てていくことも必要である。

企業や役所等、様々な組織において、人材育成にどのように取り組んでいるのか。また、これからの学校における有効な人材育成についての手立てとは。

(5)「その他」

上記（１）から（４）の視点にとらわれず、今の学校教育に関して、必要だと思われる施策やアイデアを幅広く、様々な視点から出していただきたい。

「今の学校教育には、こういうことが必要なのではないか」

「こんなことをやれば、子どもたちはいきいきと学校生活を送れるのではないか」

「他市ではこういうことをやっている。本市でもぜひやってみてはどうか」など幅広く、様々なご意見をいただきたい。